

館園施設の歴史的背景を契機とした連携 —横須賀と登戸におけるコラボ企画の展開—

横須賀市自然・人文博物館 主任学芸員 内船 俊樹
明治大学平和教育登戸研究所資料館 学芸員 塚本百合子

横須賀市自然・人文博物館と明治大学平和教育登戸研究所資料館では、2019年夏から秋にかけて、「横須賀市自然・人文博物館附属馬堀自然教育園開園60周年&明治大学平和教育登戸研究所資料館開館10周年記念コラボ企画（以下、コラボ企画）」として、企画展示やスタンプラリー、野外学習会、講演会による7事業を開催した。本稿はこの「コラボ企画」の連携に至った背景と、各事業の実践例、さらに来場者アンケートなどから明らかにした効果などについて記したい。

1 連携の背景

横須賀市自然・人文博物館附属馬堀自然教育園（横須賀市馬堀町。以下、自然・人文博物館と馬堀自然教育園）は、隣接する横須賀市立馬堀小学校・同馬堀中学校とともに、終戦までは旧日本陸軍重砲兵学校の用地であり、1959年3月に大蔵省関東財務局から横須賀市へ無償譲与を受け、同年4月に博物館の附属施設として開園した¹。同園開設当時の構想は「三浦半島の自然を保護し、過去の自然をそのまま永久に残すと共に、道標を作り一般に公開し、自然観察の教育の場にしたい²」とのことであり、当時日本国内では例の少ない博物館法による自然園として運営された。一方で、譲与の時点で園内に残置されていた火薬庫、擁壁、神社、階段、雨水排水路などの構造物については、戦史や名称などの解説・表示こそ付すことはなかったが、開園後もその多くが撤去されずに残され、今日では、三浦半島の山林や水辺の自然と旧重砲兵学校時代の遺構が見られる施設を謳っている³。

明治大学平和教育登戸研究所資料館（川崎市多摩区東三田。以下、登戸研究所資料館）が立地

する明治大学生田キャンパスは、明治大学が旧日本陸軍登戸研究所跡地の一部を大蔵省から買収し、1950年に開設された⁴。旧登戸研究所の諸施設は、教室や実験室、研究室などに活用されていたが、1980年代以降、新校舎へ急速に建て替えられていった。同研究所の存在を語り継ぐ歴史遺産が消失することを危惧した川崎市民や旧登戸研究所員から、施設の保存を求める声が上がリ、大学が旧登戸研究所の研究棟を、同研究所の歴史を語り継ぐ施設として保存・活用を決めたことを受け、2010年3月に登戸研究所資料館が開設された。登戸研究所は、旧日本陸軍の謀略用兵器を研究開発しており、時に非人道的な研究も行っていったことから、同資料館は登戸研究所の展示を通じて、科学教育・歴史教育・平和教育を行っていくことを目的としている⁵。

前述のとおり、馬堀自然教育園と登戸研究所資料館はいずれも元は旧日本陸軍の施設であり、神奈川県内において現在、博物館施設として公開されている旧陸軍施設はこれら2館のみとなっている。この稀な共通性に気づいた著者の一人塚本が、2015年12月に自然・人文博物館で開催された神奈川県博物館協会2015年度第5回研修会の折に、著者の一人内船に馬堀自然教育園の旧陸軍施設の現地調査を申し入れたことを機に、2016年1月に自然・人文博物館の近代建築史担当の菊地勝広主査学芸員と植物学担当の山本 薫学芸員を加えた4名での調査が実施された（図1）。調査の目的は、馬堀自然教育園と明治大学生田キャンパス内双方に点在する旧陸軍施設遺構群に共通点を見出すことであったが、建造時期や用途が異なる施設同士であったこと、旧陸軍重砲兵学校に関する図面や文献などがほとんどなく構造物を目視

¹ 横須賀市自然・人文博物館、1989 馬堀自然教育園特集号。横須賀市博物館報、50pp。

² 羽根田弥太、1958 横須賀市博物館附属自然教育園の開設。横須賀市博物館雑報、(5):1-2。

³ 内船俊樹（編）、2019 馬堀自然教育園たんけん図鑑。特別展示解説書、(16)。横須賀市自然・人文博物館。

⁴ 明治大学百年史編纂委員会、1994 明治大学百年史(4) 通史編Ⅱ。明治大学、565-568。

⁵ 明治大学平和教育登戸研究所資料館、2012 明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック。明治大学平和教育登戸研究所資料館、3-4。

できる範囲で比較するしかなかったことなどから、共通点や議論の糸口を見出すことができなかった。しかし、調査の過程で、双方の施設を行き来して旧陸軍施設の様々な遺構を見る面白さを来館園者が体験できる機会をつくりたい、という連携の目標が共有された。



図1 2016年1月に実施した馬堀自然教育園の調査の様子 (山本 薫 撮影)。

2018年夏、自然・人文博物館が翌年度(2019年度)特別展示として馬堀自然教育園をテーマに準備を始めたことを受け、2019年夏の同展示公開に合わせた「コラボ企画」に関するやりとりが始まった。「コラボ企画」は特別展示の付随的な展示およびスタンプラリーの企画として位置づけることとし、当初から特段の予算化は検討に入れず、それぞれの館で検討が進められた。

自然・人文博物館2019年度特別展示「おいでよ!まぼりの森 -馬堀自然教育園の60年とこれから」(2019年7月27日~11月4日、自然・人文博物館特別展示室、以下、特別展示)は、開園60周年を迎えた馬堀自然教育園の沿革を振り返り、同園内で保全されている動植物などの自然を分かりやすく発信することを主としたことから、前出の山本学芸員を主担当に自然部門の学芸員4人全員が担当した。さらに、旧日本陸軍重砲兵学校時代の歴史や遺構を再発見するコーナーも設けるため、前出の菊地主査学芸員も担当に加わ

り、当博物館ではあまり例のない、自然部門と人文部門がともに展示を作る試みを行った。この5人の打合せによって、特別展示の概要や展示業務委託のための仕様、展示解説などを詰めたほか、特別展示の内容を受けて馬堀自然教育園の現地で行う野外学習会「自然と歴史のツアー」を新たに企画した。同園ではこれまで自然部門による野外学習会を開催してきたものの、旧重砲兵学校の歴史遺産にフォーカスを当てるのは初めてのことであった。

登戸研究所資料館では、自然・人文博物館とのコラボ企画に向け、横須賀と登戸の旧日本陸軍史における関係として、「政府印刷物補給所(Government Printing Supplies Office=GPSO)」に関する研究成果⁶に注目した。GPSOとは、米国のスパイが使用する偽造証書などを製造していたCIA傘下の機関であり^{7,8}、戦後米海軍横須賀基地内に設置され、1950年から1960年初頭にかけて、主に元登戸研究所第三科員(戦前、偽札製造などを担当)が勤務した。著者らは、横須賀と登戸をつなぐキーワードを「GPSO」とし、資料の展示や講演を通じて、陸軍史の中で横須賀と登戸が関係していた事実を多くの人に知ってもらい、双方の施設を行き来するきっかけとなるよう、準備を進めた。

2 「コラボ企画」—— 7事業の実践例

2019年度を目前に控えた2018年3月、前述の5人に著者の一人塚本を加えた6人で「コラボ企画」の打合せを行った。この場で同企画が、① 1つの展示(特別展示に隣接したスペースで登戸研究所資料館が担当する展示)、② 1つの野外学習会(前出の「自然と歴史のツアー」)、③ 2つの講演会(自然・人文博物館および登戸研究所資料館それぞれで開催)、④ 2つのスタンプラリー(自然・人文博物館および登戸研究所資料館それぞれで開催)の6つに整理された。その後、登戸研究所資料館では上記①の展示に合わせて同資料館内の展示事業を追加したことから、計7事業を実践した。

①-1 展示I「横須賀にあった極秘機関 -陸軍登戸研究所と横須賀」

⁶ 明治大学平和教育登戸研究所資料館、2016 明治大学平和教育登戸研究所資料館館報、(2)。

⁷ 春名幹男、2003 秘密のファイル(下)-CIAの対日工作-。新潮社、17-18

⁸ 渡辺賢二、2011 陸軍登戸研究所と謀略戦 -科学者たちの戦争-。吉川弘文館、175。

展示期間は特別展示と同じく2019年7月27日～11月4日、会場は自然・人文博物館特別展示室に隣接したラウンジスペースにて実施した(図2)。この展示の目玉は、今まで公開されなかった「GPSO」に関する登戸研究所資料館蔵の資料12点である。これは横須賀市民にとっても初めて目の当たりにする歴史資料であり、登戸研究所の活動を紹介する資料5点と併せ、移動式覗きケース2台に入れて解説パネル6枚とともに展示した。展示には、専用のアンケートならびに登戸研究所資料館の案内パネルおよび次項展示Ⅱのチラシなどを配架・掲示した。期間中の8月17日には、特別展示の解説プログラムに本展示の紹介を加え、打合せを兼ねて来館した塚本が解説を担当した(図3)。なお、後述の講演会Ⅱに合わせて、後に展示期間を11月16日まで延長した。



図2 展示Ⅰのイメージビジュアル(左)と様子(右、萩原清司撮影)。



図3 特別展示解説にて展示Ⅰを解説する塚本(8月17日)。

①-2 展示Ⅱ「戦争遺跡写真パネル展 —近郊の戦争遺跡を訪ねて」

展示期間は前項とほぼ同じ2019年7月27日～11月3日(4日が閉館日のため、3日までの開催)、

会場は登戸研究所資料館にて実施した。同資料館が調査を行ってきた戦争遺構の中でも、三浦半島のものを中心に写真パネルで紹介した。今回のコラボを意識し、冒頭には馬堀自然教育園にフォーカスを当て、来館者を同園へ誘うコーナーとして旧日本陸軍重砲兵学校遺構の写真パネルおよび「馬堀自然教育園たんけん図鑑」³を併せて展示した(図4)。また、期間内には、著者らによる走水低砲台跡(横須賀市走水)の共同調査を実施し、同砲台跡の写真パネルを展示に加えた。



図4 展示Ⅱのチラシ(左)と様子(右)。

② 野外学習会「馬堀自然教育園 自然と歴史のツアー」

2019年11月16日10時～12時、馬堀自然教育園(図5、6)。特別展示の目的が馬堀自然教育園の自然の魅力発信と歴史の再発見であったことから、野外学習会は展示の成果を同園の来園者に還元することを目的とした。開催日は、特別展示終了後、制作された展示の一部が山本学芸員によって同園へ移設された後とし、園内の自然だけでなく旧陸軍重砲兵学校の遺構を紹介するため、前述の6人に加え、登戸研究所資料館の山田 朗館長にも参加いただいた。学芸員課程の授業の一環で来園した学生を含む参加者約20人を迎え、学習棟



図5 野外学習会にて旧陸軍重砲兵学校の遺構を見学する様子。

での説明を挟んで観察路を歩き、様々な遺構や自然を案内する2時間のプログラムを実施した。



図6 野外学習会にて水源地を見学する様子。

③-1 講演会Ⅰ「近代建築史から陸軍登戸研究所を読み解く」

開催日時は2019年10月19日13時～15時、会場は登戸研究所資料館のある明治大学生田キャンパス内の教室で、講師は菊地主査学芸員に依頼した(図7)。同学芸員が米海軍横須賀基地内の



図7 講演会Ⅰに登壇した菊地学芸員。



図8 生田キャンパス内に残る石積み(菊地勝広 撮影)

旧日本海軍工廠など旧日本軍関連の近代建築を研究していることから、講演会Ⅰでは、登戸研究所資料館をはじめとする明治大学生田キャンパス内の登戸研究所関連の遺構を、近代建築史の視点で語ることをテーマとした。登戸研究所を建築史の中に位置づけることは、同資料館では初の試みであったため、講演に先立って9月7日、打合せを兼ねた現地調査を菊地学芸員と実施した。この現地調査により、旧登戸研究所の建造物は昭和モダニズムの中に位置づけられ、デザイン的にも技術的にも優れたものであることが明らかになったほか、キャンパス内に残る石積みが、旧横須賀製鉄所のドライドッグ(現・米海軍横須賀基地内)にも通ずる貴重な石材と技術であることも指摘された(図8)。講演では、これら現地調査の成果に加え、1999年に解体された旧登戸研究所の研究棟について、その解体調査報告書から、質の良いコンクリートが使われていたことが読み取れることなどが語られた。講演会後の「交流会」では、菊地学芸員と山田同資料館長、畠山同資料館学芸員、塚本で、横須賀にある近代遺産の歴史的背景と登戸研究所建造物の比較について意見が交わされ、それが次項の講演会Ⅱのクロストークへとつながった。

③-2 講演会Ⅱ「横須賀にあった極秘機関GPSO—陸軍登戸研究所と横須賀」

開催日時は2019年11月16日14時～16時、会場は自然・人文博物館講座室で、講師は登戸研究所資料館の山田館長(近現代軍事史専門)に依頼した(図9)。講演のテーマは前述の展示Ⅰに関するもので、米海軍横須賀基地に関する歴史的発見が、登戸で見つかった資料に基づくものであったという主旨の講演を横須賀で実施することによ



図9 講演会Ⅱにて登壇した山田館長。

り、横須賀市民に登戸研究所資料館の存在を印象づけることを狙った。また、前述の野外学習会を通じて、豊かな自然の中で残されている旧陸軍重砲兵学校の遺構の重要さと魅力が山田館長から語られたことにより、これまで遺構を有しながらも適切な資料を欠くため歴史的な解説を付すことができなかった馬堀自然教育園において、歴史的な価値づけがなされた。

先に開催した講演会Ⅰにおいて、菊地主査学芸員による横須賀の近代遺産と登戸研究所建造物の比較が好評であったことから、講演会Ⅱは2部構成とし、第1部の山田館長の講演の後、第2部で



図10 講演会Ⅱでのクロストークの様子。

は山田館長と菊地主査学芸員とのクロストークを塚本のコーディネートによって実施した(図10)。
④-1、2 スタンプラリーⅠ・Ⅱ「横須賀と登戸をつなぐヒミツを解き明かせ!」

開催期間は2019年7月27日～11月4日(登戸研究所資料館では11月3日まで)、会場はスタンプラリーⅠを登戸研究所資料館、同Ⅱを自然・人文博物館で実施した。いずれのスタンプラリーも、A4用紙にスタンプ配置場所のヒントと押印枠が印刷されたシート(図11)で行うもので、Ⅰでは登戸研究所資料館でシートを配布し、同資料館内と生田キャンパス内の登戸研究所遺構付近に設置された計3か所のスタンプを探し、Ⅱでは自然・人文博物館でシートを配布し、特別展示会場内2か所と前述の展示Ⅰの会場の計3か所のスタンプを探すものとした。各スタンプが全て押されたシートは、その配布館の受付に持参すると第4の「コンプリートスタンプ」を押せることとし、スタンプラリーの利用状況を受付で間接的に把握できるようにした。このようなスタンプラリーの着想は、登戸研究所資料館で2016年度に実施した企画展関連イベント「登戸研究所の史跡探検! ラリー」におけるスタンプラリーの取組み(図12)が元になっており、前述の2種類のシー

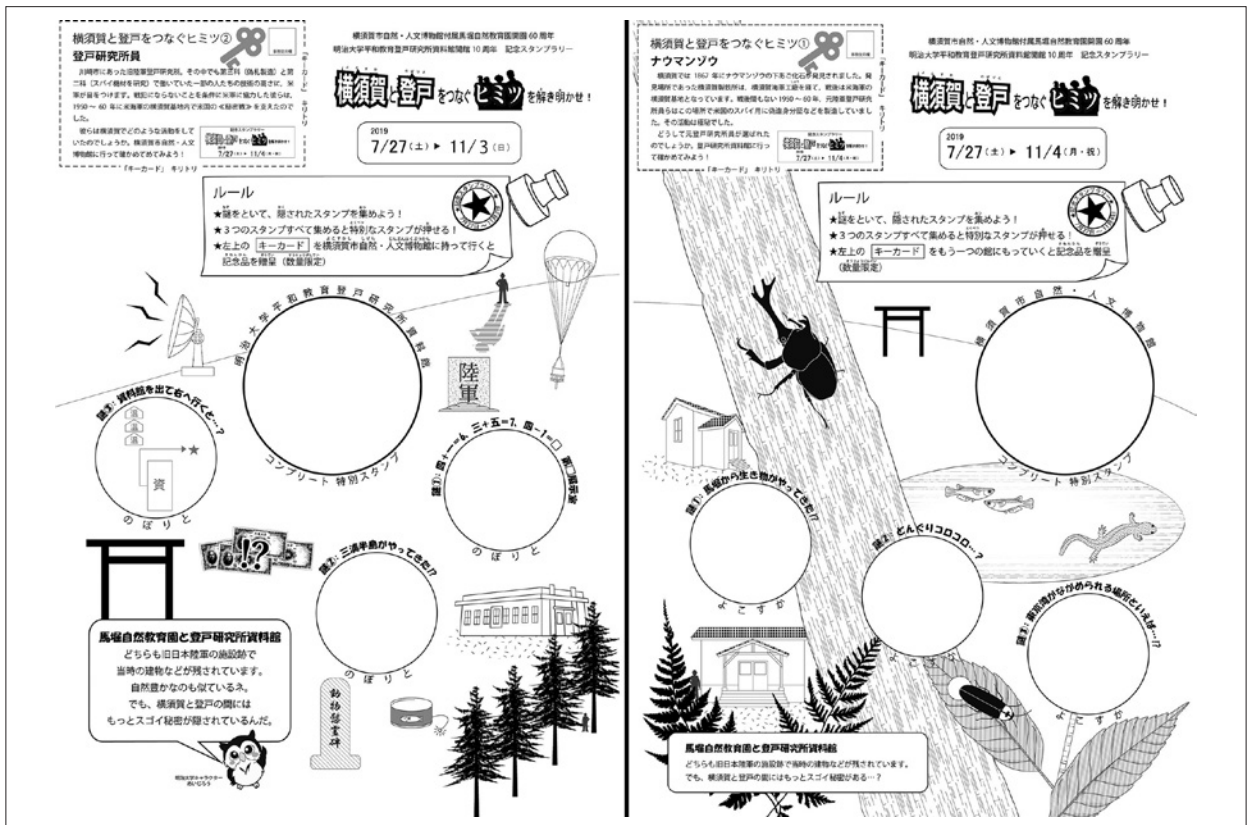


図11 スタンプラリーシート(左:Ⅰ、右:Ⅱ)。

トはいずれも同資料館の畠山学芸員と塚本が、内船と協議を重ねて制作したものである。



図12 2016年度に登戸研究所資料館で実施したスタンプラリーシート。

このスタンプラリーには、前述した各施設内の巡回促進の仕組みだけでなく、施設間を行き来する仕組みも取り入れた。シートに貼付した「鍵カード」である(図13)。このカードが配布館とは別の方の館の受付に提示されれば記念品が贈呈されることとし、施設間の移動促進と受付での間接的な利用状況把握の仕組みとした。「鍵カード」は当初、シートと別に制作してホチキス等でシートへ貼付して配布していたが、自然・人文博物館では配布数が多く、作業の簡便化からシートの端部にカードのデザインを印刷したものに作り変えて配布を行った。

3 「コラボ企画」の効果

ア 実践によって見えたこと

「コラボ企画」の実績を表1に示す。展示Ⅰの来場者数(19,856人)のうち、特別展示の開催期間と重なる期間(7月27日～11月4日)の来場者数は16,936人であり、これは前年度のほぼ同時期(2018年7月28日～11月4日)に開催した特別展示「探検!スズメバチと身近な昆虫の世界」の来場者数(16,961人)⁹とほぼ同数であった。一方、展示Ⅱの来場者数は1,832人であり、前年度同時期の来館者数2,189人よりも少なかった。

横須賀と登戸をつなぐヒミツ①
ナウマンゾウ

1867年にナウマンゾウの下あご化石が発見された横須賀製鉄所。発見された場所は、現在米海軍横須賀基地となっています。その基地内では、1950～60年に元陸軍登戸研究所員らが米国のスパイ用に偽造身分証などを製造していたのです。

彼らは横須賀でどのような活動をしていたのでしょうか。横須賀市自然・人文博物館に行って確かめてみよう!

記念スタンプラリー
 横須賀と登戸をつなぐヒミツを解き明かせ!
 2019 7/27(土) ▶ 11/4(月・祝)

明治大学平和教育登戸研究所資料館

横須賀と登戸をつなぐヒミツ②
登戸研究所員

川崎市にあった旧陸軍登戸研究所。その中でも第三科(偽札製造)と第二科(スパイ機材を研究)で働いていた一部の人たちの技術の高さに、米軍が目をつけます。戦犯にならないよう米軍に協力した彼らは1950～60年、横須賀の基地内で米国の「秘密戦」を支えました。

彼らは米登戸研究所でどのような活動をしていたのでしょうか。登戸研究所資料館に行って確かめてみよう!

記念スタンプラリー
 横須賀と登戸をつなぐヒミツを解き明かせ!
 2019 7/27(土) ▶ 11/4(月・祝)

横須賀市自然・人文博物館

ナウマンゾウの全身骨格模型

ナウマンゾウは2万年前まで日本にいたゾウのなかまです。横須賀製鉄所で見つかった化石をドイツ人地質学者のナウマンが研究したので、ナウマンゾウと呼ばれるようになりました。

登戸研究所は「秘密戦」(スパイ活動など)のための道具などを開発してた陸軍の研究機関です。戦後、明治大学生田キャンパスとなりましたが、学内には倉庫跡などが残されています。資料館も当時の建物です。

図13 鍵カード(左上下:Ⅰに添付したカードの表裏、右上下:Ⅱに添付したカードの表裏)。スタンプラリーシートには、相手館のカードが添付されることになる。

⁹ 内船俊樹、2019 (1) 特別展示「探検!スズメバチと身近な昆虫の世界」。横須賀市博物館報、(66)、3-8。

表1 「コラボ企画」の実績

コラボ企画事業	開催期間 or 開催日	来場者、参加者 or 利用者
展示Ⅰ*	7月27日 ～11月16日	19,856人 (16,936人)
展示Ⅱ	7月27日 ～11月3日	1,832人
野外学習会	11月16日	10人
講演会Ⅰ	10月19日	47人
講演会Ⅱ	11月16日	118人
スタンプラリーⅠ**	7月27日 ～11月3日	184人
スタンプラリーⅡ**	7月27日 ～11月4日	1,000人

全て2019年に実施。

* 開催期間中の入館者数にて計上。カッコ内は特別展示終了の11月4日までの小計。

** 会場に配架したシートの残数から計上。

た。これは、同資料館において前年よりも団体見学者数が減ったことによるものであるが、いずれにせよ、今回のコラボ企画が来館者数に大きく影響することはなかった。前述(①-2)のとおり、コラボを行ったことで走水低砲台跡の共同調査が実現し、展示Ⅱに新たなパネルを追加することができたことは成果として挙げることができる。

野外学習会では、自然部門、人文部門それぞれの学習会参加経験者が一緒に参加する機会となった。参加者同士の会話も生まれ、いつもとは違った角度からの解説を聞くことで、馬堀自然教育園の魅力を見出す機会となった。

講演会Ⅰでは、台風19号の影響や広報活動に予算をあてられなかったことから、来場者数は47名であったが、93%が満足したと回答した。年齢構成は表2の通りであり、前年度登戸研究所資料館で開催した講演会の平均年齢構成とほぼ同じだった(2018年度同資料館開催の別の講演会の例¹⁰:20歳未満は3%、20～30代は2%、40～50代は27%、60代以上は67%)。また、来場者の77%が普段同資料館を利用していたが、感想には「軍事研究所と建築物の関係はユニーク」

「登戸研究所について建築的な視点からの見方が興味深かった」「建築という観点が新鮮だった」など、今まで同資料館では取り上げてこなかった「建築」というテーマに対して、来場者が狙い通りに関心を持ったことがわかった。

講演会Ⅱでは、来場者数は定員の100名を超え、当初用意していた資料120部が足りず増刷するほどであった。来場者は、69%が横須賀市もしくは近隣在住であり、登戸研究所資料館に行っていない回答者は60%に上った。内容について満足したとの回答が84%で、その理由として「登戸研究所の事を知ることが出来、また、馬堀自然教育園の新たな魅力に触れることができました」「登戸研究所の歴史から横須賀基地での米軍への雇用を初めて知りました」が挙げられ、講演会Ⅰに続き、自然・人文博物館の利用者や横須賀の地域住民に新たな知見をもたらし、地域の魅力を再発見する機会になったことが分かった。また、今回のコラボを通じて新たに生み出された企画「クロストーク」については、「すばらしいアイデアだと思います。コラボで横須賀・登戸の新発見があったことに驚きました」、「相互交流、他分野の視点を入れると新たに見えてくるものがあると、クロストークで感じられたので、今後も両館の相互交流を通じての研究、講演会を実施してほしい」といった感想が寄せられ、コラボの意義を来場者に伝えたいというクロストークの意図が伝わったと実感できた。また、年齢構成は表2の通りであり、自然・人文博物館の自然部門イベントの利用者層(2019年度特別展示の例¹¹:20歳未満が29%、20～30代が19%、40～50代が26%、60代以上が19%)とは大きく異なる結果となった。コラボを通じ、自然部門と人文部門の垣根を超えたことで、普段とは異なる年齢層にも訴求することができた。

スタンプラリーⅠでは、期間中184人の参加があり、内78人が3か所全てのスタンプを集めた。また、自然・人文博物館で配布したスタンプシートに添付された「鍵カード」を持ってきた来館者は21人だった。スタンプラリーⅡでは、会場に配架したシート1,000枚が来場者の手に取ら

¹⁰ 明治大学平和教育登戸研究所資料館、未発表 2018年度企画展「帝銀事件と登戸研究所」記念講演会・特別プログラム講演会来場者アンケート集計。

¹¹ 柴田健一郎、未発表 2019年度特別展示「おいでよ!まぼりの森 ―馬堀自然教育園の60年とこれから」アンケート集計結果。

れた。また、同じ会場に配架したぬり絵シート「チャレンジ!まぼりの森の昆虫ぬり絵」の利用が707枚で、前年度同時期の特別展示で配架したぬり絵シート「チャレンジ!スズメバチぬり絵」の利用(1,280枚)数の6割に満たないが、これは来場者の年齢構成の違いによるものと考えられる。残念ながら自然・人文博物館の受付での対応件数を正確に把握できなかったが、同博物館受付担当職員によれば、スタンプラリーⅡの配布枚数の5~6割に相当する500~600枚のシートに「コンプリートスタンプ」が押印され、十数人がスタンプラリーⅠに貼付された「鍵カード」を持って受付に来たとのことである。いずれのスタンプラリーも半数以上の利用者がシートに沿った各施設内の巡回を行っており、巡回ツールとして有意義に機能したと考えられるが、施設間の行き来、とりわけ横須賀→登戸への移動促進の機能は十分に果たされたとは言えず、今後の課題となった。

イ アンケートから見たこと

講演会アンケートの分析は前述の通りであり、展示アンケートについては以下に記す。

展示Ⅰの来場者年齢層は、20歳未満が24%、20~30代が6%、40~50代が36%、60代以上が29%だった。来場者居住地は横須賀市内および近隣(三浦半島)が47%、川崎市内在住者が3%だった。登戸研究所資料館を知らないと回答したのは47%であり、来場のきっかけは「来館して初めて知った」が34%と最も多かったが、展示内容については81%が「分かりやすい」と答え、64%が満足、22%がまあ満足したと回答した。その理由を示す感想として「今まで知らなかった横須賀と登戸の共通点を、展示を通して見ることができ、とても面白かった」「初めて知る事柄が多く勉強になりました」「教科書には載っていない事実、史実が学べた」が挙げられる。また展示Ⅰを通じて同資料館へ「行ってみたい」と回答した人は75%だった。

展示Ⅱの来場者年齢層は、20歳未満が11%、20~30代が9%、40~50代が12%、60代以上が68%、来場者居住地は川崎市内在住者が19%、横須賀市および近隣(三浦半島)在住者は5%だった。来場のきっかけは、展示Ⅰと同じく「来館して初めて知った」と回答した人が42%と最

も多かったが、展示内容については62%が満足、27%がまあ満足したと回答した。また、展示Ⅱを通じて、自然・人文博物館へ行ってみたいと回答した人は52%だった。その理由として「どういところでどういう物があるのかを知りたい」「母の地元の横須賀にも共通点があり、行ってみたいです」との回答があった。横須賀市および近隣(三浦半島)在住者からは、「思いがけず地元三浦のものを見られてよかった」「地元で、こんな所があったのはおどろき。より資料を大切にしていきたい」といった感想が寄せられた。

展示Ⅰ、Ⅱのアンケートには、それぞれスタンプラリーについても質問を設けた。スタンプラリーⅠ(展示Ⅱアンケートにて質問)に関しては、10%が参加(もしくは参加予定)、59%が参加していない、17%が開催を知らないと回答があった。スタンプラリーⅡ(展示Ⅰアンケートにて質問)に関しては、31%が参加(もしくは参加予定)、37%が参加していない、25%が開催を知らないと回答があった。

アンケートを通じて、それまで互いの施設について知らなかった(もしくは行ったことがなかった)一方の来館者が、連携先の施設との歴史的関連について知り、当該施設へと興味をもつことが分かったことから、コラボ展示によって互いの施設の存在を来館者に伝え、「行きたい」と思わせるアプローチができた。また、一方の施設について連携先の施設の研究分野によって再発見する試みは、その施設を普段利用している住民に新たな視点や知的関心呼び起こすことにも繋がった。展示Ⅰの来場者年齢構成が、展示Ⅱならびに講演会Ⅰ・Ⅱと比較して、高齢者層(60代以上)が少なく若・中年層(60歳未満)が半数以上という傾向であった(表2)。これは若・中年層の利用者が多かった自然・人文博物館自然部門の特別展¹¹⁾に合わせて実施したことで、特別展の来場者が展示Ⅰを見る流れに繋がったためであり、前出のアンケート結果(展示Ⅰの「来場のきっかけ」について「来館して初めて知った[34%]」との回答が最も多かった)からもうかがえる。登戸研究所資料館においては、若・中年層の来館者数が高齢者層に比して少ないことが課題の一つであるが、利用者層が異なる他施設の自然部門事業とコラボを行ったことで、若・中年層に当資料館の展

表2 コラボ企画アンケートの主な集計結果

設 問	講演会 I	講演会 II	展示 I	展示 II
年 齢				
20歳未満	0%	2%	24%	11%
20～30代	3%	1%	6%	9%
40～50代	27%	24%	36%	12%
60代以上	67%	72%	29%	68%
居住地				
横須賀市および近隣	0%	69%	47%	5%
川崎市内	32%	3%	3%	19%
その他	65%	18%	39%	77%
登戸研究所資料館に 行ったことがある	77%	36%		
行ったことがない	23%*	60%	項目なし	項目なし
登戸研究所資料館を 知っている	90%	61%	41%	項目なし
知らない	10%	35%	47%	
登戸研究所資料館へ 行ってみたい			75%	
そうは思わない	項目なし	項目なし	10%	項目なし
自然・人文博物館へ 行ってみたい**	49%	項目なし	項目なし	52%
そうは思わない	19%			25%
感 想				
満足した***	93%	84%	86%	89%
分かりやすい	項目なし	項目なし	81%	項目なし

アンケートは全て登戸研究所資料館で作成・集計。

* 登戸研究所資料館側で開催した講演会であったため、「はじめて来館」もここに入れた。

** 「行ってみたい」との回答とは別に「すでに来館した」と回答したのは19%。

*** 回答「満足した」「まあ満足した」の合算値。

示を見てもらい、認知度を高めることができました。

以上を振りかえると、これまで接点のなかった2施設が歴史的背景を契機としたコラボ企画で連携したことにより、次のような成果が得られた。

1) 自然・人文博物館あるいは登戸研究所資料館を利用しているそれぞれの地域住民に対して、コラボ企画を通じて連携先の施設や歴史に興味をもたせ、巡回促進を図ることができた。

2) コラボ企画の準備を通じて、互いの施設を合同で調査することにより、それぞれの施設にとって新たな視点を生み出し、一部については展示や講演会に反映させることができたほか、今後の継続的な連携が必要な研究テーマも見出すことができた。

3) 自然・人文博物館内では、自然部門が主導してコラボ企画を進めたことにより、これまで同部

門が担当していた馬堀自然教育園の歴史的な価値を掘り起こした上、同部門の担当イベントの従来参加者層とは異なる年齢層の講演会参加者に対して、同教育園の魅力を伝えることができた。

4) 登戸研究所資料館では、自然・人文博物館の自然部門とのコラボ企画により、同資料館の利用が少ない若・中年層に対して、同資料館の出展を見る機会を大きく高めることができた。

前述の成果が得られた一方で、実現できなかったことや課題も明らかになった。そこで、今回のコラボ企画を出発点とし、今後も施設で連携した事業を継続するつもりである。例えば、調査研究では、登戸研究所資料館の協力のもと馬堀自然教育園(旧重砲兵学校)の旧日本陸軍史における背景の解説を作ったり、自然・人文博物館の自然部

門の協力のもと登戸研究所資料館（明治大学生田キャンパス）周辺の自然に関する解説を作ったりして、それぞれの施設の新たな魅力を発信していきたい。一方で、本稿で紹介した連携事例を今後は他地域にも広げ、神奈川県内に残る他の戦争遺構を取り上げ、地域を越えた歴史や魅力の再発見

と地域住民への発信を行っていききたい。

最後に、2019年度特別展示アンケートの一部データを提供いただいた自然・人文博物館柴田主任学芸員ならびに掲載写真を提供いただいた自然・人文博物館菊地主査学芸員および萩原清司主査学芸員および山本学芸員にお礼申し上げます。